資料

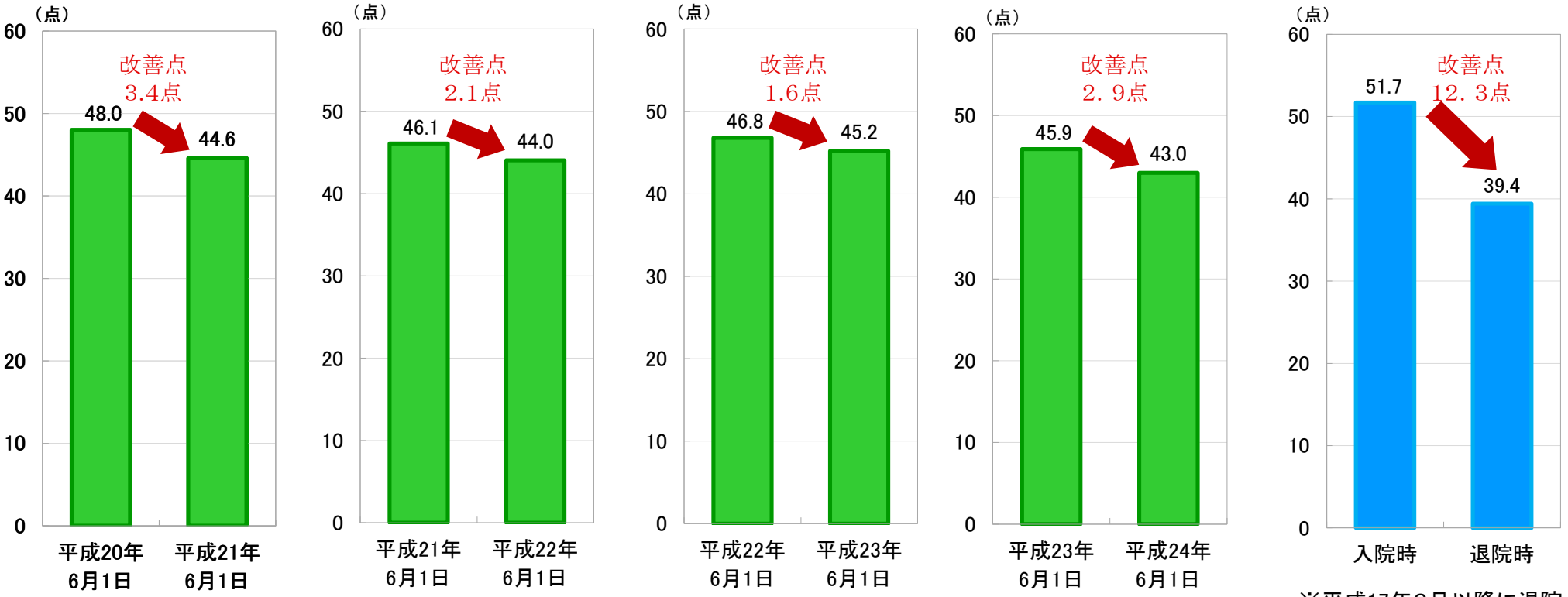
1．年度期間中及び入院から退院までのスコア平均値の変化

１年間ごとの分析及び入院から退院までを比較した分析のいずれにおいても、ナスバスコア平均値の減少が認められ、NASVA療護施設における治療改善効果が認められた。

１年間ごとのスコアの平均値の変化及び改善点

平成20年度期間（252人）　平成21年度期間（256人）　平成22年度期間（276人）　平成23年度期間（256人）

入院から退院までのスコア平均値の変化及び改善点（424人）

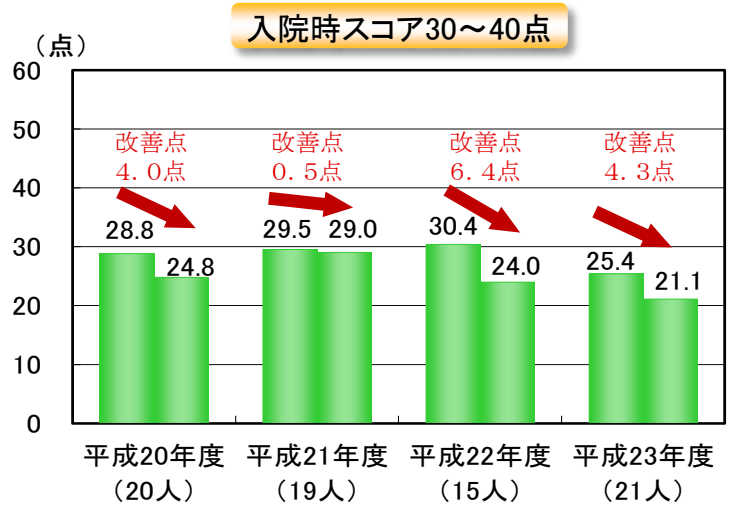


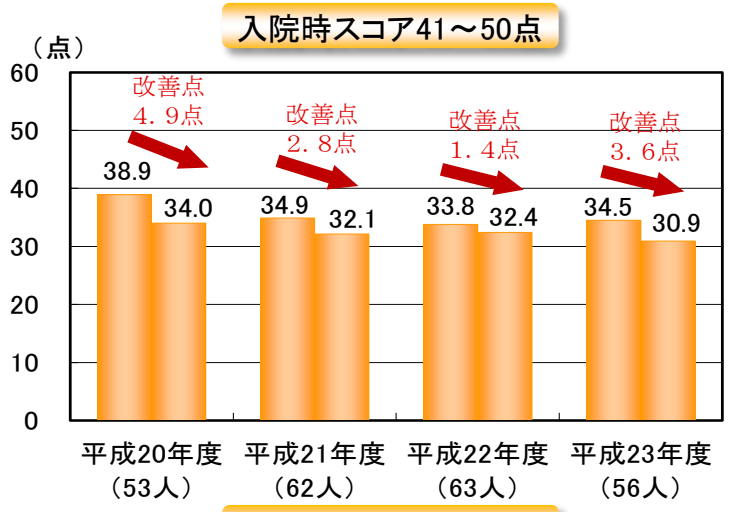
※1年ごとに、対象者全員（各期間の対象者は同じ）のスコア平均値を示している。
※改善点は、比較する2つの時点のスコア平均値の差分である。
※対象者は、6療護施設の入院患者である。

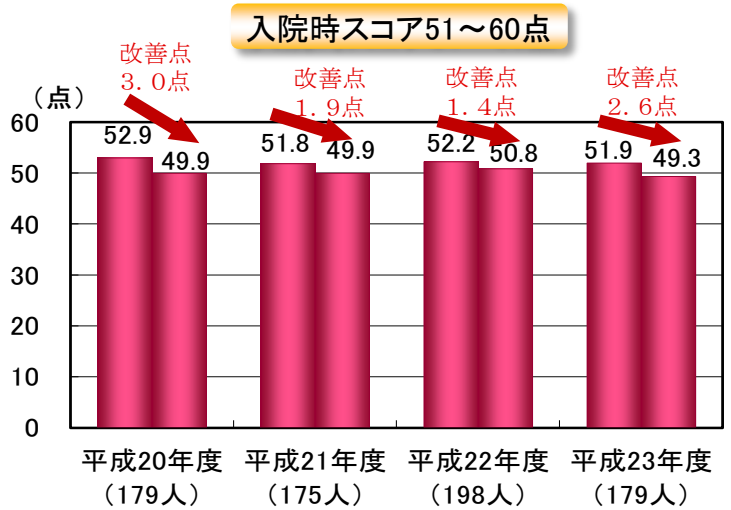
※平成17年6月以降に退院した患者424人
※入院から退院までのスコア平均値
※平均入院期間：2年7ヶ月

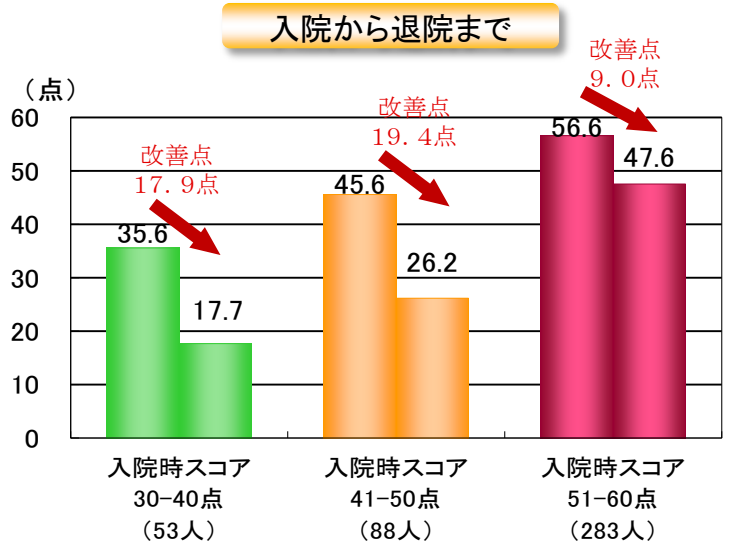
2. 入院時スコア別のスコア平均の変化（年度期間中及び入院から退院まで）

各年度期間ごとの治療評価について、重症度別（入院時スコア（10点刻み））の平均値の変化を検討したところ、いずれの期間、グループにおいてもナスバスコア平均値が減少しており、「51～60点」の最も重度のグループについても、療護施設における治療改善効果があることが認められた。





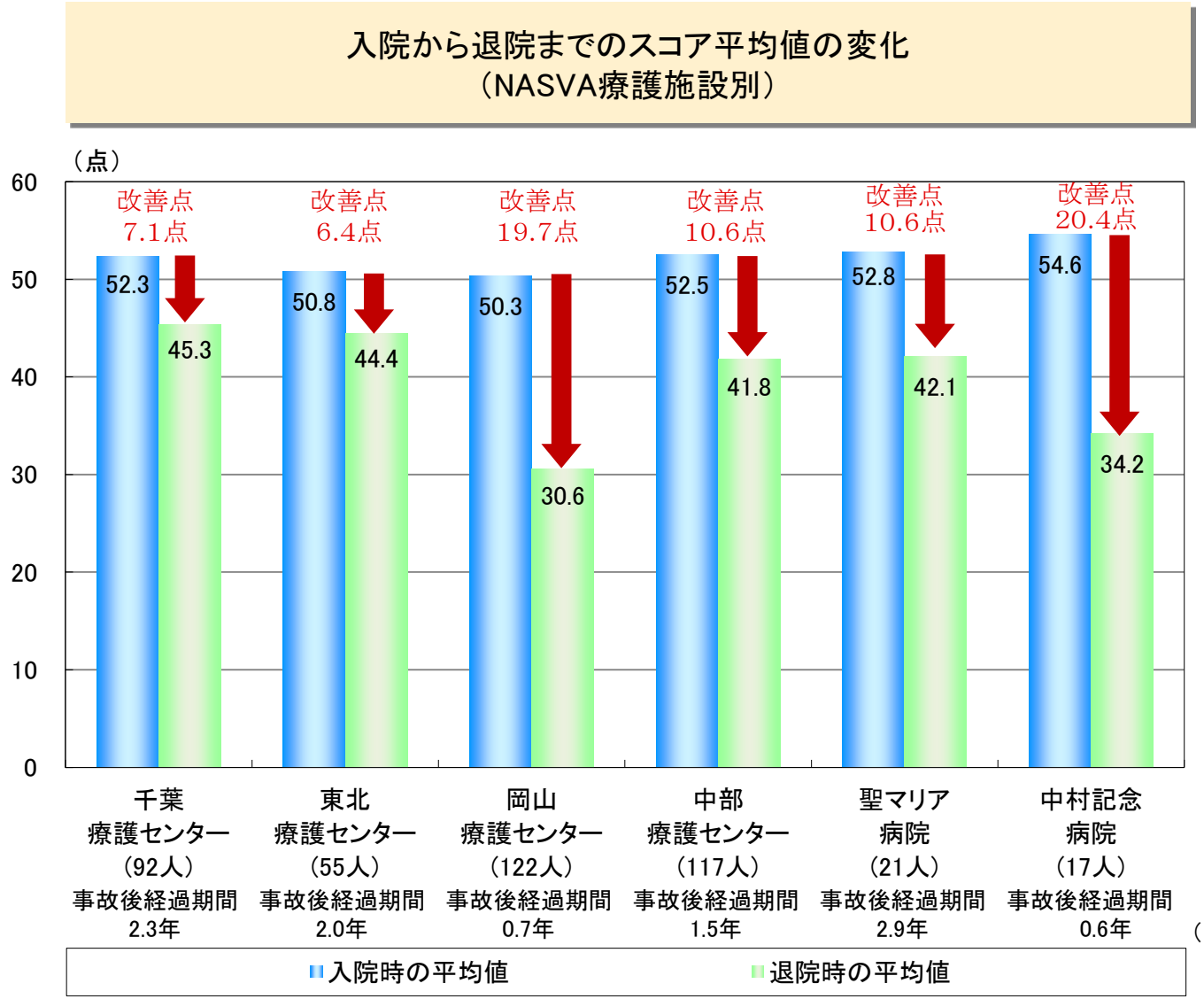




※対象者を入院時スコア別に分け（10点刻み）、各期間の開始と終了時点（各期間の対象者は同じ）のスコア平均値を示している。

3．療護施設別の入院から退院までのスコア平均値の変化

入院から退院までのスコア平均値の変化について、いずれの療護施設においても、治療改善効果が認められた。なお、治療改善効果が高い岡山療護センターと中村記念病院は、「事故後経過期間が短い」という特徴が認められる。

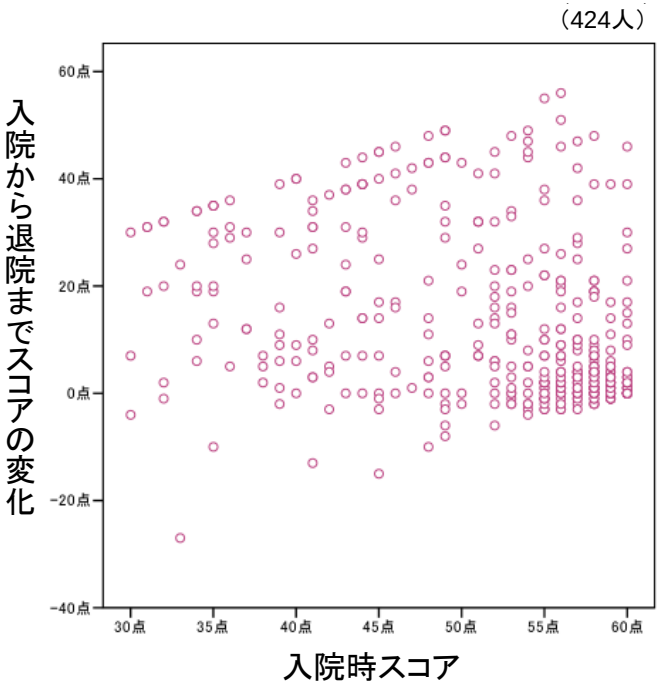


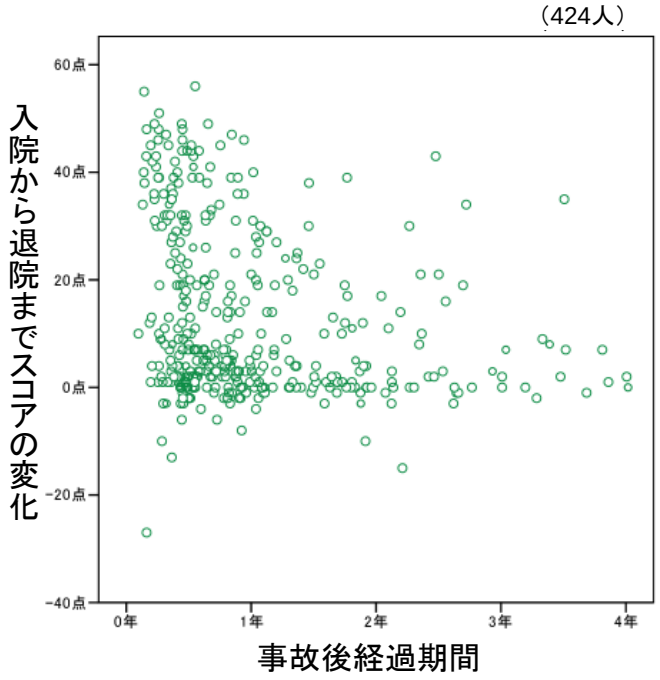
※改善点は、入院時の平均値と退院時の平均値を引き算しているため、グラフの値を引き算した場合と小数点第一位が一致しないことがあります。

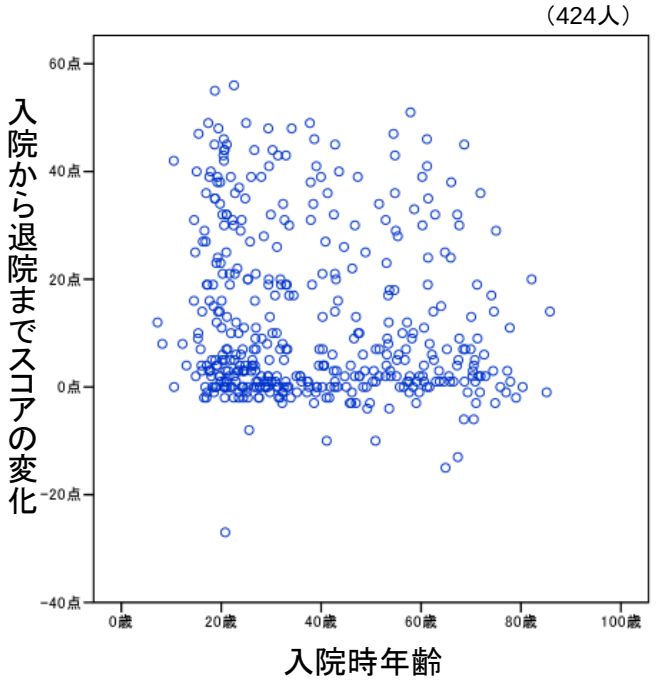
4. 入院から退院までの平均値の変化と各種要因との関連

「入院から退院までのスコアの変化」と、「入院時スコア」、「事故後経過期間」 、「入院時年齢」との関連を検討するため、患者ごとの値を図に示している。

患者の分布を検討すると、「入院時スコアが高くても改善している患者がいること」「事故後経過期間が早い場合に改善が良いこと」「入院時の年齢は、スコアの変化にあまり関連がないこと」などが示されている。







※グラフの中の〇は、患者を表している。

◎遷延性意識障害重症度評価表（ナスバスコア）

ナスバスコアとは、日本脳神経外科学会で定義された「植物状態」を基に、NASVA療護施設の入院患者の症状について、その程度を判定するための統一基準として、平成17年度より適用を開始したもの。

遷延性意識障害重症度評価表

	重度 １０点	高度 ９点	中等度 ７点	軽度 ５点	ごく軽度 ０点
１　運動機能	□四肢の自発運動はなし、痛み刺激で四肢の動きなし	□四肢の自発運動はあるが無目的、疼痛刺激に対し四肢の動きがみられる	□四肢に合目的性のある自発運動がみられる、疼痛刺激を払いのける	□命令に従い体の一部を動かせる	□自力で体位交換が可能、車いすに乗せると不十分でも自力で浮かす
２　摂食機能	□咀嚼、嚥下全く不能で経管栄養（胃ろう又は経鼻）	□ほとんど経管栄養 □ツバを飲み込む動作又は咀嚼する動作あり □多少ならジュース、プリンなどの経口摂食の試みが可能	□咀嚼可、又は咀嚼はダメでも嚥下大略可能で、介助により経口摂取するがときにむせる □経口栄養の不足分は経管で補う	□自力嚥下可能、咀嚼不十分でもよい □全粥、キザミ食を全量介助にて摂取可 □スプーンを持たせると口に運ぶ動作あり、又は不十分ながら食物を口に入れる	□不十分ながらでも自分でスプーンで食べる
３　排泄機能	□排尿、排便時に体動等全く認められず	□排尿、排便時、多少の体動等あり	□失禁はあるが、イヤな顔をする。又は体動が多いなどの合図あり	□規則的に排便、排尿させることにより、失禁を予防できる □失禁あるも、周囲にわかる（独自の）教え方をする	□夜間を除き、失禁せず教える
４　認知機能	□開眼しても瞬目反射なし	□開眼し瞬目反射あり □追視せず、焦点が定まらない	□声をかけた方を直視する □移動するものを追視する、ＴＶを凝視するが、内容を理解していないと思われる	□近親者を判別し、表情の変化がある □気に入った絵などを見て表情が変わる	□簡単な文字を読む □数字がわかる □テレビを見てその内容に反応し、笑う
５　発声発語機能	□発声、発語全くなし □気切の場合でも口の動きもない	□発声（うめき声）等あるが発語なし □気切の場合、何らかの口の動きあり	□何らかの発語あるが全く意味不明 □呼名に、ときに不明瞭な返事がある □気切の場合、呼名に対する口の動きあり	□ときに意味のある発語あり □呼名に返事あり □気切の場合、検者の口真似をする	□簡単な問いかけに言葉で応じることができる □気切の場合、口の動きが問いかけの内容に合っている
６　口頭命令の理解	□呼びかけ（命令）に対する応答全くなし	□呼びかけに対し、体動、目の動きなどの何らかの反応あり	□呼びかけにときに応じることもあるが、意思疎通は図れない	□簡単な呼びかけに、ときに応じ、ときに意思疎通が図れる	□呼びかけに対し、常に迅速で正確な反応が得られる

※入院要件：ナスバスコアの合計点が30点以上

※例えば、認知機能5点の改善とは、「開眼しても瞬目反射なし」（10点）だったが、「近親者を判別し、表情の変化がある」（5点）となった場合

◎今回の分析方法

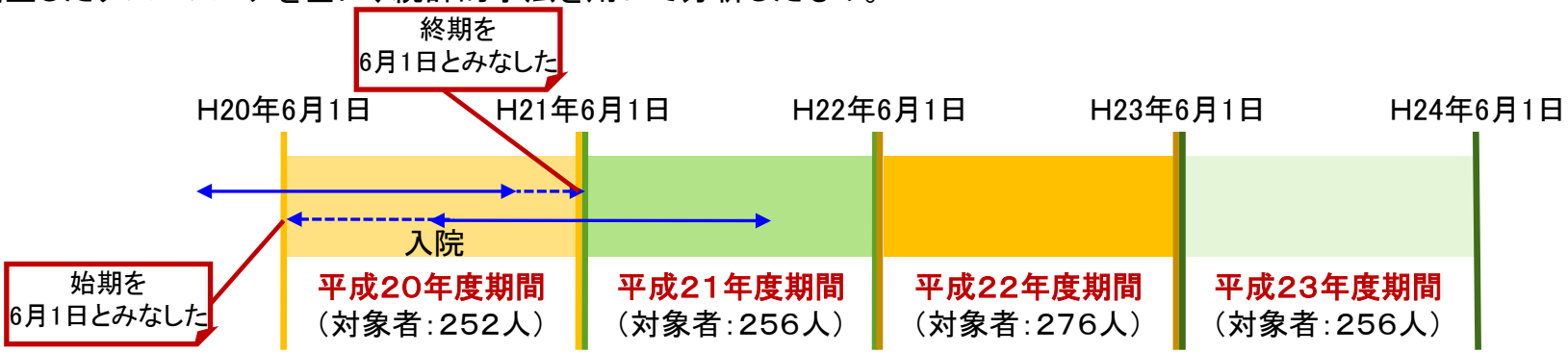
◇データ収集

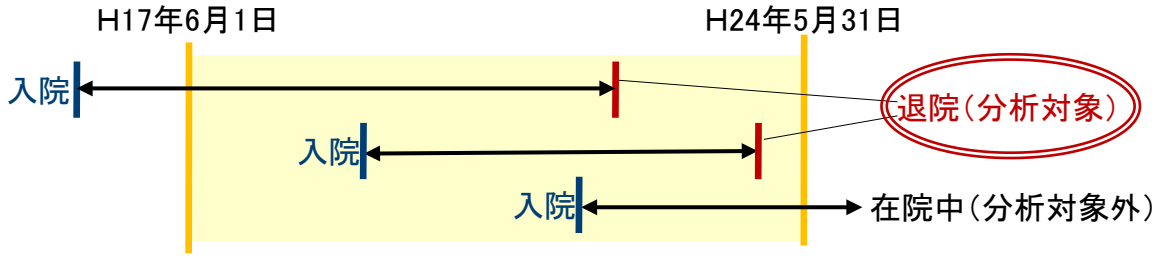
本統計分析は、平成9年9月からの「治療特化※」以降の千葉、東北、岡山及び中部の4つのNASVA療護センター、中村記念病院、聖マリア病院の2つのNASVA委託病床の入院患者を対象として、調査時点における入院患者のデータ（ナスバスコアによる判定結果）を収集し、蓄積されたデータを基に実施。

※療護センターの入院患者の長期滞留傾向を解消に向かわせ、運営の効率化に資するための方向転換措置。

◇在院期間中の1年間ごとの改善の状況

入院患者（入院時30点以上の方）のスコアが、在院期間中の1年間ごとに、どれだけ改善したかについて、原則として6月1日時点で調査したナスバスコアを基に、統計的手法を用いて分析したもの。



◇入院時から退院時改善の状況

平成17年6月1日から平成23年5月31日までの間に退院した患者（424人）について、入院から退院までの間にどれだけスコアが改善したかについて、統計的手法を用いて分析したもの。